

5. 自分のリスク、必要な保険・不要な保険を押さえておこう

ポイント

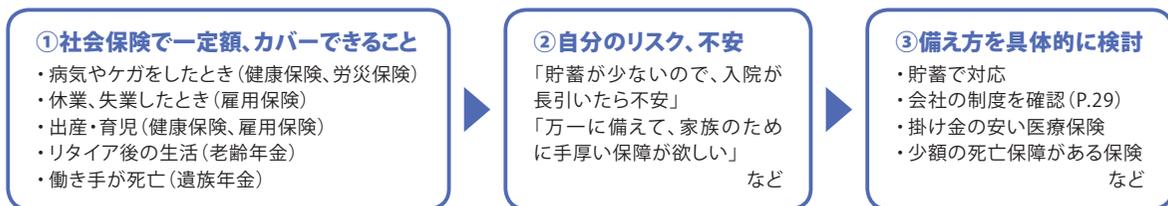
- 民間の保険は、公的な社会保険や会社の福利厚生、貯蓄でもまかなえない経済的なリスクや不安をカバーするもの。
- ライフステージによっても入るべき保険は変わる。見直しポイントもチェック。

社会保険(P.13)でカバーできることと カバーできない自分のリスクを洗い出そう

民間の保険加入を検討する際には、まずは公的な社会保険でカバーできる分野を理解したうえで、自

分自身のリスクを洗い出すこと。不要な保険への“入り過ぎ”には注意しましょう。

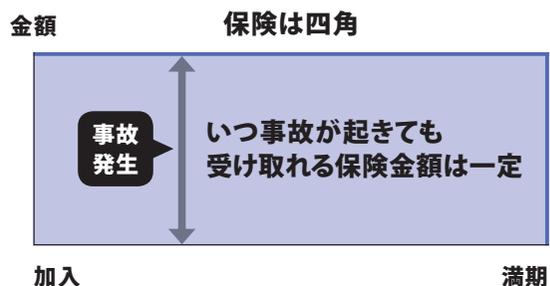
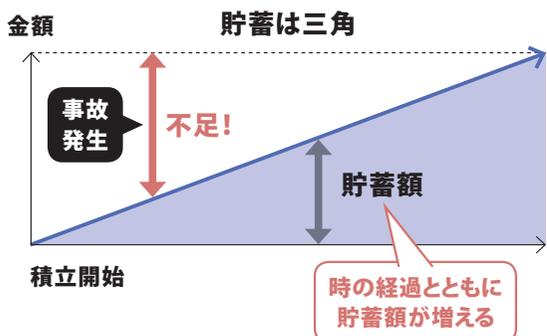
リスクの洗い出しフロー



貯蓄or保険？ 仕組みの違いを知ろう

下の図で示すように「貯蓄は三角、保険は四角」と言われ、貯蓄が時の経過とともに右肩上がりが増えていく一方、保険は加入した直後から一定の保障額が確保でき、加入してすぐの事故などでも保険金

が受け取れます。よって、小さなリスクやずっと先のイベントは何にでも使える貯蓄（運用）で備え、貯蓄や公的な社会保険でカバーできない事故や不測の事態には保険で備えるのが正解です。



20代で知っておきたい。 保険の概要を押さえよう

何に備えたいのか、目的によって必要な保険は異なります。大別すると、世帯主に万一のことがあった際に備える「死亡保障」が必要なのか、あるいは自身の「病気やケガ」に備えるかの2つになります。

保険加入を検討する際には、単身者なら病気やケガの保障、家族がいる世帯主なら死亡保障など、優先順位を考えましょう。

保障が大きくなるほど保険料も高くなります。ムダなく適切なバランスでの加入が重要です。

死亡保障

終身保険
定期保険
収入保障保険

病気やケガ

医療保険
がん保険
介護保険



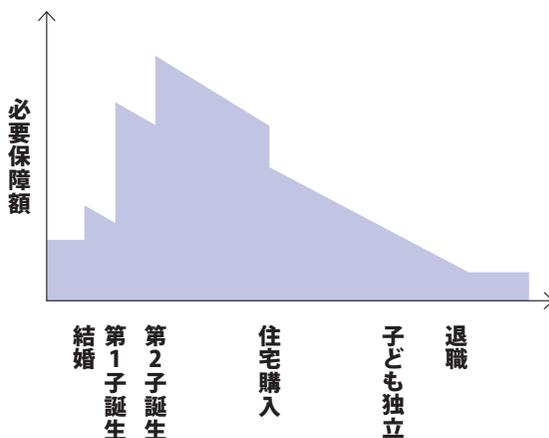
保険の見直しタイミングを知ろう

保険は一度入ったらおしまいではなく、ライフステージによって必要な保障額が変わるため、見直しが必要となります。

結婚し、扶養するべき家族が増えたら、生計の担い手の死亡に備えた保険を検討しましょう。子どもが生まれれば、誕生時に必要保障額が増え、子どもの成長とともに保障額は減っていきます(右図参照)。

さらに、近年増えている自然災害に対する備えや、自身が加害者になるケースも踏まえ、加入の義務化が進んでいる自転車保険も検討を。車を運転するなら自動車保険の加入は必須です。

ライフステージによって必要な保障額は変わる



Column お金のプロ・FPが教えます

会社の団体保険、共済も検討しよう

団体保険とは、会社などの団体が保険契約者となり、その団体に所属する社員などが加入できる保険です。会社またはグループ会社の社員の福利厚生を目的とし、保険料が個人契約より割安で、給与天引きが可能。剰余金が配当金として還元されるなど個人契約と比べて多くのメリットがあります。ただし、退職をすると継続して保障を受けられなくなる可能性もあります。

共済とは協同組合や労働組合などが提供している相互扶助の保障制度で、掛け金が民間の生命保険と比べて安い場合が多く、加入条件や保障内容がシンプルで加入しやすいなどが特徴です。一方で、保険料が割安な分、保障額が少ない、保障内容の選択肢が少ないなどのデメリットもあります。